

- A. その人は、以下の2つがともに認められる外傷的な出来事に暴露されたことがある。**
- (1)実際にまたは危うく死ぬまたは重症を負うような出来事を、1度または数度、あるいは自分または他人の身体の保全に迫る危険を、その人が体験し、目撃し、または直面した。
 - (2)その人の反応は強い恐怖、無力感または戦慄に関するものである。
注：子供の場合はむしろ、まとまりのないまたは興奮した行動によって表現されることがある。
- B. 外傷的な出来事が、以下の1つ(またはそれ以上)の形で再体験され続けている。**
- (1)出来事の反復的、侵入的、苦痛な想起で、それは心像、思考、または知覚を含む。
注：小さい子供の場合、外傷の主題または側面を表現する遊びを繰り返すことがある。
 - (2)出来事についての反復的で苦痛な夢
注：子供の場合は、はっきりとした内容のない恐ろしい夢であることがある。
 - (3)外傷的な出来事が再び起こっているかのように行動したり、感じたりする(その体験を再体験する感覚、錯覚、幻覚、および解離性フラッシュバックのエピソードを含む、また、覚醒時または中毒時に起こるものを含む)。
注：小さい子供の場合、外傷特異的な再演が行われることがある。
 - (4)外傷的出来事の1つの側面を象徴し、または類似している内的または外的きっかけに暴露された場合に生じる、強い心理的苦痛
 - (5)外傷的出来事の1つの側面を象徴し、または類似している内的または外的きっかけに暴露された場合の生理学的反応性
- C. 以下の3つ(またはそれ以上)によって示される、(外傷以前には存在していなかった)外傷と関連した刺激の持続的回避と、全般的反応性の麻痺：**
- (1)外傷と関連した思考、感情、または会話を回避しようとする努力
 - (2)外傷を想起させる活動、場所または人物を避けようとする努力
 - (3)外傷の重要な側面の想起不能
 - (4)重要な活動への関心または参加の著しい減退
 - (5)他の人から孤立している、または疎遠になっているという感覚
 - (6)感情の範囲の縮小(例：愛の感情を持つことができない)
 - (7)未来が短縮した感覚(例：仕事、結婚、子供、または正常な寿命を期待しない)
- D. (外傷以前には存在していなかった)持続的な覚醒亢進症状で、以下の2つ(またはそれ以上)によって示される。**
- (1)入眠、または睡眠維持の困難
 - (2)いらだたしさまたは怒りの爆発
 - (3)集中困難
 - (4)過度の警戒心
 - (5)過剰な驚愕反応
- E. 障害(基準B、C、およびDの症状)の持続期間が1カ月以上**
- F. 障害は、臨床的に著しい苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こしている。**
- ▶ 該当すれば特定せよ
- 急性 症状の持続期間が3カ月未満の場合
- 慢性 症状の持続期間が3カ月以上の場合
- ▶ 該当すれば特定せよ
- 発症遅延 症状の発現がストレス因子から少なくとも6カ月の場合

◆ 引用・参考文献

- 1 米国精神医学会(APA)著、高橋三郎他訳「DSM-IV-TR精神疾患の診断・統計マニュアル新訂版」
医学書院 2004
- 2 エバリー, GS. 他著、飛鳥井望監訳「惨事ストレスケア—緊急事態ストレス管理の技法」
誠信書房 2004
- 3 藤森和美編「子どものトラウマと心のケア」 誠信書房 1999
- 4 藤森和美編「学校トラウマと子どもの心のケア」 誠信書房 2005
- 5 福岡県臨床心理士会編「学校コミュニティへの緊急支援の手引き」 金剛出版 2005
- 6 福岡県臨床心理士会編「学校における緊急支援の手引き
—緊急事態に直面した人のこころのケアのために—」 2001
- 7 兵庫県教育委員会「学校危機対応実践ハンドブック」 2001
- 8 飯塚 峻「学級担任の危機管理 A～Z」 図書文化社 1997
- 9 自殺防止対策有識者懇談会報告「自殺予防に向けての提言」 厚生労働省 2002
- 10 金吉晴也編(厚生労働省研究班編)「心的トラウマの理解とケア」 厚生労働省 2001
- 11 コーチン, ST. 著、村瀬孝雄監訳
「現代臨床心理学—クリニックとコミュニティにおける介入の原理—」 弘文堂 1980
- 12 久留一郎「PTSD—ポスト・トラウマティック・カウンセリング」 河台出版社 2003
- 13 ミッチェル, JT他著、高橋祥友訳「緊急事態ストレス・PTSD対応マニュアル」
金剛出版 2002
- 14 文部科学省「非常災害時における子どもの心のケアのために」＜改訂版＞ 2002
- 15 文部科学省初等中等教育局国際教育課「在外教育施設安全対策資料：心のケア編」 2003
- 16 西澤 哲「トラウマティック・ストレス
—PTSDおよびトラウマ反応の臨床と研究のすべて—」 誠信書房 2001
- 17 シェーンフェルド, DJ 他著、元村直樹監訳「学校危機への準備と対応」 誠信書房 2004
- 18 下園壮太「自殺の危機とカウンセリング」 金剛出版 2002
- 19 スタム, BH編、小西聖子他訳「二次的外傷性ストレス」 誠信書房 2003
- 20 総理府青少年対策本部編「子どもの自殺防止のための手引書」 大蔵省印刷局 1981
- 21 高橋祥友「自殺の心理学」 講談社現代新書 1997
- 22 高橋祥友「群発自殺」 中公新書 1998
- 23 高橋祥友「青少年のための自殺予防マニュアル」 金剛出版 1999
- 24 高橋祥友「自殺、そして遺された人々」 新興医学出版社 2003
- 25 富永良喜・高橋哲他「子ども版災害後ストレス反応尺度(PTSSC15)の作成と妥当性」
発達心理臨床研究 第8巻 2001
- 26 富永良喜「集団プログラムの変遷—ディブリーフィングからストレスマネジメントへ」
平成15年度兵庫県教育大学学長裁量経費研究報告書 2004
- 27 山本和郎「コミュニティ心理学」 東京大学出版会 1986
- 28 ユール, W他著、久留一郎訳「スクール・トラウマとその支援」 誠信書房 2001
- 29 上地安昭編著「教師のための学校危機対応実践マニュアル」 金子書房 2003
- 30 若林一美「自殺した子どもの親たち」 青弓社 2003